

社会問題小説としての『ハード・タイムズ』の魅力

田 中 孝 信

Hard Times (1854) is fundamentally built up of a binary opposition, Fact vs. Fancy. Since the central world is a patriarchal middle-class society, the opposition can also be seen as Reason vs. Sensibility, that is, according to the then view of gender, Man vs. Woman. This paper makes clear the existence of some heterogeneous elements involved in the center, those that do not fit into the dichotomy.

Society, based on male discourse, tries to obliterate all things feminine to maintain its homogeneity. But men can hardly contain their suppressed desires. The same can be said of women who are subjugated to the center, such as Louisa. Her distorted sensibility, appearing in the form of sexuality, shakes society to instability. It is now easily exposed to attacks from excluded women.

True, *Hard Times* is not as realistic and persuasive as Gaskell's *North and South* (1854-55), but achieving consistency because of its shortness, it directs readers' eyes to the inhumanity of the industrialized society, and insists forcibly on the necessity of feminizing it to some degree.

序

『ハード・タイムズ』(*Hard Times*, 1854)には、大きく言って二つの問題点がある。まず、週刊連載という形式ゆえに、ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)にとって「スペースの窮屈さによる困難は、決定的な打撃となる」¹⁾。自らが主宰する『ハウスホールド・ワーズ』(*Household Words*)誌が扱う、産業主義、労働組合、政治経済学、教育、離婚、サーカスといった時事性の高い題材を取り上げながらも、十分に展開できない。次に、物語の舞台となるイングランド北部の産業都市は、ディケンズの活動範囲ではない。H・I・ダットンとJ・E・キングは、『ハード・タイムズ』と、それに続いて『ハウスホールド・ワーズ』に連載されたギaskell(Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65)の『北と南』(*North and South*, 1854-55)がともに、1853年から翌年にかけて起こったプレストン・ストライキをもとにしている点に着目して比較し、『ハード・タイムズ』は戯画的なまでに描き出された労使双方の「紋切り型の人物像によって力強い作品になっているが、歴史資料としては貧弱である」とする。それに対して「ミセス・ギaskellは、ディケンズが理解しなかったこと、すなわち、『労働者は急進的であると同時に責任能力を持ち得る』し、雇用者は権威的であると同時に公平であり得

る、ということを理解している。この点で『北と南』は『ハード・タイムズ』より写実的である』²と述べる。では、このように批判的に捉えられる『ハード・タイムズ』の社会問題小説としての魅力はどこにあるのだろうか。それは単に「紋切り型の人物像」によるものだろうか。

『ハード・タイムズ』の基本構造は作品冒頭から明らかであり、「システム」や「事実」から成る中心世界と、「生命力」や「空想」を具現化したサーカスという周縁に排除された世界とが対比される。エンゲルス (Friedrich Engels, 1820-95) 以上にマンチェスターの労働者を熟知していたと言われるギャスケルが、³低賃金やひどい住居環境といった労働者階級独自の問題に関心を示したのに対して、ディケンズは産業化に伴う具体的な諸問題の分析より、『ハード・タイムズ』を献呈したカーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) と同じく、その背後にある功利主義や政治経済学が人間性に及ぼす影響に関心を持ったのである。実際ディケンズは、チャールズ・ナイト (Charles Knight, 1791-1873) に宛てた手紙のなかで、「わたしの諷刺は、数字と平均だけで、その他のものを何も見ない人々——最近のもっともひどい、実に言語道断な悪徳の代表者たちを相手にしているのです」(1854年12月30日)⁴と述べる。そして、作品に描かれた、中心世界における特定の価値コードによる一元支配は、F・R・リーヴィスが言うところの「道徳的寓話」⁵ならではの明晰な描写によって、極端にまで誇張される。だがはたして一元化は、堅固に成し遂げられているのだろうか。本論では特に、中心世界が家父長制社会である点に着目して、「事実」と「空想」の対立が、「理性」対「感性」、すなわち、当時のジェンダー観に則り、「男性」対「女性」としていかに描き込まれているかを分析することで、そうした二項対立の構図では捉え切れない、中心世界が内包する「異質なもの」の存在を明らかにする。そうすることで、社会問題小説としての『ハード・タイムズ』の魅力に迫ってゆきたい。

I 母性の否定

功利主義や政治経済学の言説は、父権的秩序の基盤として、「権威的な言葉」となる。具体的に言えば、引退した工場主で、後に国会議員となるグラッドグラインドが推進する教育システムの中核を成す「事実」が、模範生ビッツァーの馬の定義 (I.2.5)⁶に見られるように、実体を伴わない言葉の集積でしかないにもかかわらず、監視の眼差しの下、意味構造の硬化・完結した緊密な統一体として人々の言語意識に侵入し、無条件の承認を要求するのである。この言説は、「不思議に思う」や「空想」といった、まったく相反する「女性的なもの」との融合・接近によって自らを活性化しようとはせず、それらの使用を冒流行為と見なし、決して許さない。そこには、ピーター・ブレイチャーの論じる「意思の疎通の欠如」⁷が生じる。

それどころか社会は、一元性を保持するために母性の抹殺という手段を取る。ミセス・グラッドグラインドの母としての役割は否定され、ルイーザとトムの子弟は、父親グラッドグライ

ドが作り出したものとして定義される。また銀行家兼製造業者バウンダビーは、サリー・シャトルワースが「女性の働きをイデオロギー上永遠に消し去る表現」⁸⁾であると指摘する、中産階級男性の唱える「セルフメイド・マン」神話に自らを合致させるために、母親ミセス・ペグラーを目の前から追放するのみか、皮肉にも作品中最大のフィクションである、「人生に起こったさまざまな事実」(I.4.16)から成る立身出世物語のなかで彼女を悪い女に仕立て上げ、母から生まれてきた事実を否定する。彼のフィクションから彼の思考を辿れば、「自力で叩き上げた人間」(I.4.14)である彼はどぶで大きくなった、それどころか、「どぶで生まれた」(I.4.15)。どぶは泥と水から成る。したがって、彼は泥と水から自然発生的に作られたのであって、母から生まれたのではない、ということになる。彼は自らの存在を換喩的に捉えながら、元来象徴的意味を持つべき投影物そのものになってしまうのである。自分が生まれる前に亡くなっていた祖母までも、「ひどくたちの悪い、最悪の老婆」(I.4.15)に仕立て上げ、母系の血縁を棄却しようとする。ビッツァーの場合、母性の否定はさらに徹底しており、母親は救貧院に閉じ込められる。バウンダビーもビッツァーも一種の「母親殺し」を行ない、それによって家族の存在そのものを否定するのである。こうした母性の否定は、言わば一つの大家族を形成するサーカスの世界と著しい対照を成していると言える。

母性の否定は、それが有する、あらゆる「女性的なもの」の排除ともなる。バウンダビーは「空想」から「母親」に至る、男らしくないと彼が判断するあらゆるものと戦う圧制者なのである。それらが排除された空間では、全ての行為の責任は男性にあるとされ、女性は男性にとって市場価値を帯びた商品でしかない。グラッドグラインドが夫人を妻に選んだ理由の一つは多額の持参金だったし、トムは、弟を唯一の生きる縁とする姉がバウンダビーとの結婚で示す自己犠牲を、男である自分が受ける当然の権利だとしか見なさない。トムは、ルイーザ個人の心の内を理解しようとはせず、女は男よりもうまく物事に対処できると一言で片づけてしまう。このとき女性という性的他者に対する見方は、労働者という階級的他者に対する見方と同じく一様化され、個としての存在価値は無視されるのである。

そうした画一化は、男性・理性対女性・感性という枠組みのなかで、女性は感情的な生き物であるという暗黙の前提を生み出す。したがって、グラッドグラインドがバウンダビーの結婚申し込みをルイーザに伝えたときの彼女の落ち着き払った態度や、バウンダビーが家政婦ミセス・スパークにルイーザとの結婚を伝えたときの彼女の超然とした様子は、逆に男性を当惑させる。このように、いくら自分たちのイデオロギーに当てはめて処理しようとしても、未知であり不安にさせる女性を無性化し、自分たちに分かりやすく御しやすい存在にするための手段が、事実偏重主義教育なのである。それによって、ジェンダーの二分化という枠組みのなかで、男性による女性支配が可能となる。

こうした社会をディケンズは狂気の世界として描き出す。理性を標榜し、自分たちの論理で物事を推し進め、自分たちの言語しか認めず、それへの絶対的服従を強要する姿勢に、偏執狂

者の姿を見出しているのである。それを反映して、「空想」を排除した産業主義論理そのものであるコークタウンは、「絶え間ない蛇のような」煙や「狂った象が憂鬱げに頭を振るように、単調に上下に動」く蒸気エンジンのピストンといった比喩表現、さらには黒い運河や紫色に染まった川といった描写と相俟って、「色を塗り立てられた野蛮人の顔と同様、赤色と黒色が不自然に混じり合った町」(I.5.22)となる。ディケンズは町をジャングルのイメージで満たすことでその野蛮性を強調し、極端なまでの一貫性や正確さに理性・文化とは程遠い狂気を見ているのである。

赤と黒で野蛮人の出陣化粧を施された家に住むバウンダビーの論理は、そうした狂気の端的な例と言えよう。彼の解釈によれば、彼は「自力で叩き上げた人間」だ、したがって、家族を持っていようはずがないのである。彼はこの自閉症的妄想を、他人にまで適用する。手でもって働く労働者は「手」(I.10.63)であり、それ以外のものとして扱えば、論理に矛盾を来すことになる。足でも与えようものなら、「六頭立ての馬車に収ま」りたがるし、口を与えれば、「海亀のスープや鹿肉を、それも金のスプーンで、食べ」(I.11.70)れるのではと期待させることになる。ゆえに、彼らは「手」でなければならないのである。

II 歪められた感性

しかし、『ハウスホールド・ワーズ』創刊号の序文に述べられているように、ディケンズは、人間の心には、女性のみならず男性にも、生まれつき「空想」の光が備わっているという信念を持っていた。その抑圧は、男性自身が、本来併せ持つ感性をイデオロギーやエトスによって歪められた欲求として抱え込むことになる。

理性とは相容れない、そうした無秩序な欲求は、時として女性との係わりのなかで、表面に噴出して来る。バウンダビーが娘ほども年の違うルイーザに結婚を申し込むのは、彼女が教育によって無性化されたからではなく、彼女のなかに女性特有の性的魅力を見出したからに他ならない。彼の性的欲求不満を反映するかのごとくに、彼の頭はグロテスクに誇張され、今にも爆発せんとする「風船玉」(I.4.14)に譬えられる。爆発し頭を失った後に残るのは、産業主義や宗教の制御が効かない、理性には程遠いリビドーの世界なのである。

ディケンズは、バウンダビーが性的欲求を潜め持つことを示唆するために、バウンダビーの誘示する「セルフメイド・マン」像とはまったく相容れない官能的な「東洋の(oriental)ダンサー」(II.8.185)に彼を譬える。このイメージはさらに、彼の言動がことごとく否定するものを象徴するサーカスと彼とを結びつける。なぜならサーカスは、服もろくすっぽまともわず、足も露わな人々からなる官能性を帯びた空間だからである。

トムの場合は、父親の教育によって「空想」とのあらゆる接触が禁じられたために、莫大な財産を自由にできる女性になら喜んで我が身を売ろうとする反面、感情面でいびつな成長を遂

げ、肉欲にふけるという極端な結果を生じる。

勤勉、実直、克己、誠実といったヴィクトリア朝家父長制中産階級が標榜する徳を備えた労働者スティーヴンも例外ではない。「機械の停止がいつも生み出すあの奇妙な感じ——自分の頭のなかで動いていた機械が停止したという感じを抱」(I.10.64) くほどに産業システムに囚われた彼もまた、その反動として、性的欲求を抑え切れない。彼は、妻帯者でありながら、友人の女工レイチェルとの肉体的結びつきという、社会の規範から逸脱した行為を強く希求する。自堕落な妻との生活に絶望感を覚えるスティーヴンが、彼女を看病するレイチェルを前にして見る結婚式の夢が、レイチェルへの性的欲求を表わしているのは明らかだ。それは同時に妻に対する殺人衝動をも含む暴力的なものである。

理性による一元化を成し遂げているかに見えた社会は、「理性」という仮面の下で、抑圧され歪められた感性が性的欲求となって蠢いていることで、その一元性を突き崩されているのである。

Ⅲ ルイーザのセクシュアリティ

しかし、「空想」の抑圧がルイーザにもたらす結果ほどに、社会にとって破壊的なものはない。なぜならそれは、「家庭の天使」像に反するセクシュアリティの表出という形を取るからである。ルイーザにセクシュアリティが内在することは、繰り返し強調されてきた。顔に「燃えるべきものを持たぬ火」(I.3.12) を見せる彼女が暖炉を見つめる場面は、物語の節目ごとに現われる。その火のイメージは、ルイーザが女になったときを境に、抑圧され歪められた性的感情をはっきりと示すことになる。父親がバウンダビーからの求婚を伝えたとき、窓外に目をやる彼女は、「町には、どんよりした単調な煙だけしかないように見えます。でも夜になると、火が突然現われて来るんです、お父様！」(I.15.100) と彼の質問に答える。このとき火は、語り手の言うコークタウンの住民とグラッドグラインド家の子供たちとの類似性を背景に、ギャレット・スチュアートの言葉を使えば、「彼女の、抑圧されながらも生氣溢れる……性的エネルギーを表わす図像」³⁾となる。そのエネルギーは、「自らを卑下して見せては威張り散らす」(I.4.14) のに恍惚とする自慰的男性バウンダビーとの不毛な結婚生活では健全な捌け口を見出せず、弟への近親相姦的愛情に変化する。そして、上流階級の放蕩児ハートハウスの餌食になりかけたとき、ルイーザの性的感情は爆発寸前にまでになる。

だが、ルイーザはハートハウスの誘惑から逃れる。ただし彼女は夫のもとに戻るのではなく、今の自分を作り出した責任を負うべき父親に救いを求める。このときグラッドグラインドの哲学は崩れ去る。そればかりか、助けを求める娘を父が救うというメロドラマの図式は成り立たず、その役割は、母性を体現する、道化の娘シシーという下層階級の女性に委ねられる。グラッドグラインド家において、父性は自ら権力を放棄するのだ。それと同時に、作品世界全体に混

沌が生じる。ルーザーがセクシュアリティの持ち主であることが公になったとき、彼女はミセス・ブラックプールのような売春婦同然の女性と結びつき、中産階級と労働者階級の区分は不確定になる。

IV 逆襲する女たち

このように「異質なもの」を内包する社会は、周縁に排除した、ミセス・ペグラーやミセス・ブラックプールといった女性たちの攻撃に晒される。彼女たちは、家父長制社会のイデオロギーに挑みさえするのである。

バウンダビーが立身出世のフィクションの正統性を主張するために、いくら母親を悪い女に仕立て上げ、母性の価値を否定しようとも、大団円で彼女の出現はその虚構を一挙に崩し去る。このとき、社会の作り上げた「セルフメイド・マン」成立の要因である母性の排除が、実際上は不可能であることが示される。そればかりか、ミセス・ペグラーの登場と、知らず知らずのうちに息子を非難するその口調は、まるで「母親殺し」に復讐するかのよう、彼を衆人環視のなかで去勢してしまう。「彼の態度には、怒鳴り散らしながらも臆するところがあって、そのためまったく意気が揚がらず、この上なく馬鹿げて見えた。……さすがの威張り屋も、たとえ両耳を切り取られてもこれ以上ではないと思われるほど、がっくり惨めな姿を見せていた」(Ⅲ.5.263)という描写が、これまでの膨れ上がったイメージと何という対照を成すことか。彼女が彼のエゴイズムをしほませたこの時点は、彼の利己的なフィクションに対する現実の勝利であり、それは同時に、母性の否定に基づく男性社会の資本主義的商品生産に対して、母性による生殖が勝利を収めるときでもある。

スティーヴンの妻による社会への攻撃はさらに激しさを増す。彼女は、19世紀中期の中産階級男性が理想とし、しだいに労働者階級の男性に、少なくとも熟練労働者に一つの理想像として広まって行った、秩序と平安から成る家庭空間の成立を阻む役割を担う。スティーヴンが夢見るのは、世間での荒仕事に疲れて帰って来る彼を暖かく迎えてくれる清潔な炉辺である。それは、妻が決して与えてくれることのない、貞淑な「天使」レイチェルの統治によって初めて可能となるものである。しかし、彼のそうした願いを嘲笑うかのごとくに、ミセス・ブラックプールは、家庭に閉じ込められることもなく、また外界に永久に追放されることもなく、自らの意志で両空間を不断に、それも何の前触れもなく行き来する。スティーヴンは、妻が戻って来るたびに金を払って追い出そうと試みるが、この「金銭取引」という社会がもっとも重視する手段によっても、彼女を「追っ払」(I.11.73)うことはできない。バウンダビーが毎年の送金と引き換えに母親に沈黙を強いても、母親を排除できないのと同じと言えよう。

このようなミセス・ブラックプールは、『ハード・タイムズ』の本質であるコークタウンの描写からほとんど抜け落ちている「汚穢」を体現する。町には、エンゲルスやギャスケルの作

品に見られるような汚物は実質的にはない。地平線上の「黒々とした染み」、「黒々とした固まり」(Ⅱ.1.110)と見なされるのみだ。その代わりに、全ての汚れが彼女に付着し、彼女は飲酒・売春といった産業主義の弊害そのものとなる。この汚れは、毒気を含んで空气中を伝染し、彼女の「ぼろと汚れと跳ね上げた泥」(Ⅰ.10.67)から成る、見るも厭わしい姿は、スティーヴンが両手で顔を覆っても、追い払うことのできないほどの強さを帯びる。

もちろん一義的にはミセス・ブラックプールは、我々の同情を得るべきスティーヴンを不幸に陥れる忌むべき存在として描かれている。二人の関係はバウンダビーとルイーザの夫婦関係ともつながり、結婚という個人の密接な結びつきであるべきものが、人間味のない社会の犠牲となっていることが示される。だが同時に、彼女の墮落の原因は社会にもあるのではないだろうか。中産階級が求める労働者像を体現したスティーヴンが中産階級の犠牲となって惨めな死を迎えるのに対して、彼女の方は最後まで生き残る。そこには墮落した女性にもたらされる必然的な死といった図式はない。ディケンズは、彼女のその汚れた身体を浮遊させ続けることで、社会が自らの責任を問うことなく排除した「汚穢」の存在を、読者の意識に突きつけるのである。

結 論

以上見てきたように、男性による厳格な一元支配は、それ自体狂気の側面を帯びているのみならず、男性自身のなかに、抑圧され今にも爆発せんとする欲求が蠢いているのである。それは、内に取り込まれたルイーザのような女性にも共通するものであり、歪められた感性は、セクシュアリティの表出という形で社会を震撼させる。そうした不安定な社会は、排除された女性たちの侵入にも晒される。

結末では、男性性と女性性の断絶は、以前にも増してひどくなる。バウンダビーもどきは増殖し、結婚という父権社会の基盤すらも否定するピッツァーは、自己の利益のみを考えて、順調に出世階段を登って行く。逆に、事実や数字を「信仰」、「希望」、「慈愛」に従わせたグラッドグラインドは社会から孤立し、「空想」が道徳的発達をもたらすことを学んだルイーザは、セクシュアリティを表出した罰として、「墮ちた女」同然に、幽閉され尼僧のような生活を強いられる。だが、この一見、男性性の勝利と思える構図は、社会の不毛さ・愚かさを示唆する。なぜなら、まるで女性恐怖症に取りつかれたかのごとくに、女性そのものを排除しようとするバウンダビーやピッツァーの行為は、結果として、皮肉にも、父権社会の再生産を危機に陥れることになるからである。

このように、最後の場面においても男女の対立を描き出すという手法は、ジェローム・メキアーがライヴル関係を指摘する『北と南』の場合とはまったく逆だ。¹⁰⁾『ハード・タイムズ』も『北と南』もともに、労使問題を扱っておきながら、最後は中産階級の家庭空間で物語が終

わるという点で、いかにも中産階級的な社会問題小説と言える。だが、『ハード・タイムズ』が、労働者と子供の類似性を維持するために、バウンダビーとスティーヴンの労使関係と、グランドグラインドとルイーザの父子関係を、とを隠喩的に捉えたために、両者の間に距離が存在したのに対して、『北と南』では男女関係は、キャサリン・ギャラハの言葉を借りれば、「個人的関係と階級間の関係に、単一の行動基準を適用する」¹³¹ヒロイン、マーガレットを媒介として、労使関係と密接に結びつく。そして、自我のぶつかり合いのなかでの自己表現を通して、結末での男女の結びつきと、完全とは言えないまでも、階級間の和解が描き出される。そこには、性善説を取るユニテリアン派のギャスケルの心的態度が反映されている。

女性の描写においても両作品には相違がある。『ハード・タイムズ』では、ルイーザは犠牲者として描かれながらも、規範から逸脱したために罰せられる。それに対して『北と南』では、マーガレットの道徳的影響力以上に、彼女が帯びる、もう一つの側面、すなわち、「家庭の天使」像からの逸脱に力点が置かれている。彼女は、女性の領域たる家庭空間から公的領域に越境する。そこには「力」への欲求すら見て取れる。そればかりか、男性もまた、自らの欲望を投影したはずの「家庭の天使」像に満足できず、女性のセクシュアリティに強く魅せられる。男性の持つ女性性や母性すらも描き出される。男性作家ディケンズが本質的には家父長制イデオロギーに囚われているのに対して、女性作家ギャスケルは、社会規範に従いながらも、同時にそれを否定せんとするのである。

ディケンズは、女性のみならず労働者を描く際にも、中産階級男性としての視点を保っている。抑圧された人々に同情し、労働者を搾取する雇用者たちを非難することで、自らが属する階級とは距離を置いていると主張する一方で、デイヴィッド・ロッジが分析したように、¹³²お伽話の要素を皮肉を生み出す修辭的技法として用いることで、その諷刺を、赤裸々な描写ほどには中産階級読者にとって不快なものではなくしてしまっているからだ。新興工業地帯を描いた初期の絵画の文学版とも言える『骨董屋』のブラック・カントリーや、『荒涼館』における鉄の国の描写に見られた、¹³³ピクチャレスクな光景を眺める観察者としての立場から、ディケンズは脱し切れていないと言える。スティーヴンを除いて、労働者個人の内面に分け入ることはなく、そのスティーヴンにしたところで、中産階級的な父子主義の代弁者に過ぎない。『北と南』が、労使間の父子関係を否定し、最終的に階級の壁を越えた相互依存を唱えるのとは大いに異なる。

しかし我々は、労使問題がどのように扱われているかよりはむしろ、ディケンズが、当時のジェンダー観が孕む問題を、中心世界の一員ゆえの限界があるにせよ、取り上げた点に注目すべきだ。ギャスケルは『北と南』を『ハウスホールド・ワーズ』に連載中、リアリズム的な説得力を持たせるためにも、十分なスペースを必要とした。それはディケンズとの間に対立を生み、彼は『ハウスホールド・ワーズ』の売上減について、副編集長のW・H・ウィルズ(William Henry Wills, 1810-80)に宛てた手紙のなかで、「販売が落ちたと聞いて残念だ。

しかし驚きはしない。ミセス・ギaskellの物語が、あんなふうな分け方では、極端に退屈だからだ¹⁴⁾と述べて、その責任を彼女にあると見なすほどだった。彼女とは対照的に、ディケンズは、紙幅の制限という困難のなかで、もっとも効果的な方法を模索する。そして、作品の短さゆえに可能とも言える一貫性でもって、極端なまでの男性支配を描き出し、逆にそれが潜め持つ混沌・カーニヴァル性を、女性との係わりのなかで際立たせる。そこには、境界外に魅せられるディケンズ自身の姿も垣間見られる。このようにして、ジェンダーの定義がいかにも不自然なものであるかを暴くことで、男性の言説に基づいた産業化社会が内包する非人間性に読者の目を向けさせ、社会がある程度「女性化」することの必要性を、リアリズム上の欠点にもかかわらず、『北と南』以上に力強く訴えるのである。これが、社会問題小説としての『ハード・タイムズ』の魅力の一つと言えるのではないだろうか。力強さは、ダットンやキングの言う「紋切り型の人物像」によってのみもたらされているのではない。

【付記】

本論は、2004年10月3日に大手前大学で開催されたディケンズ・フェロウシップ日本支部と日本ギaskell協会の合同大会でのシンポジウム「社会小説家としてのディケンズとギaskell」での発表原稿を加筆・修正したものである。

【注】

- 1) 1854年2月某日付、ジョン・フォスター宛て書簡。Graham Storey et al. (eds.), *The Letters of Charles Dickens, the Pilgrim Edition, vol. 7: 1853-1855* (Oxford: Clarendon, 1993) 282.
- 2) H. I. Dutton and J. E. King, "Ten Per Cent and No Surrender": *The Preston Strike, 1853-1854* (Cambridge: Cambridge UP, 1981) 199.
- 3) John Lucas, *The Literature of Change* (Hassocks, Sussex: Harvester, 1977) 55.
- 4) 1854年12月30日付書簡。 *The Letters of Charles Dickens, vol. 7, 492.*
- 5) F. R. Leavis, *The Great Tradition* (1948; Harmondsworth: Penguin, 1977) 259.
- 6) テキストは、Charles Dickens, *Hard Times, the Oxford Illustrated Dickens* (Oxford: Oxford UP, 1981)を使用。括弧に入れて編・章・頁数を示す。
- 7) Peter Bracher, "Muddle and Wonderful No-Meaning: Verbal Irresponsibility and Verbal Failures in *Hard Times*," *Studies in the Novel* 10 (1978): 306.
- 8) Sally Shuttleworth, "Female Circulation: Medical Discourse and Popular Advertising in the Mid-Victorian Era," *Body/Politics: Women and the Discourses of Science*, ed. Mary Jacobus, Evelyn Fox Keller, and Sally Shuttleworth (New York and London: Routledge, 1990) 51-52.
- 9) Garrett Stewart, *Dickens and the Trials of Imagination* (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1974) 167.
- 10) Jerome Meckier, *Hidden Rivalries in Victorian Fiction: Dickens, Realism, and Revaluation* (Lexington: UP of Kentucky, 1987) 47-92.
- 11) Catherine Gallagher, *The Industrial Reformation of English Fiction* (Chicago and London: U of Chicago P, 1985) 168.
- 12) David Lodge, "The Rhetoric of *Hard Times*," *The Language of Fiction* (London: Routledge & Kegan Paul, 1966) 145-63.
- 13) Now, the clustered roofs, and piles of buildings, trembling with the working of engines, and dimly resounding with their shrieks and throbbings; the tall chimneys vomiting forth a black

vapour, which hung in a dense ill-favoured cloud above the housetops and filled the air with gloom; the clank of hammers beating upon iron, the roar of busy streets and noisy crowds, gradually augmenting until all the various sounds blended into one and none was distinguishable for itself, announced the termination of their journey. [Charles Dickens, *The Old Curiosity Shop*, the Oxford Illustrated Dickens (Oxford: Oxford UP, 1987) 325.]

But, night-time in this dreadful spot!—night, when the smoke was changed to fire; when every chimney spirted up its flame; and places, that had been dark vaults all day, now shone red-hot, with figures moving to and fro within their blazing jaws, and calling to one another with hoarse cries—night, when the noise of every strange machine was aggravated by the darkness; when the people near them looked wilder and more savage;.... (OCS 336)



Philip James de Loutherbourg,
"Coalbrookdale by Night," 1801



Paul Sandby Munn, "Bedlam Furnace,
Madely Dale Shropshire," 1803

As he [trooper George] comes into the iron country farther north, such fresh green woods as those of Chesney Wold are left behind; and coalpits and ashes, high chimneys and red bricks, blighted verdure, scorching fires, and a heavy never-lightening cloud of smoke, become the features of the scenery. [Charles Dickens, *Bleak House*, the Oxford Illustrated Dickens (Oxford: Oxford UP, 1978) 845.]

14) 1854年10月14日付書簡。 *The Letters of Charles Dickens*, vol. 7, 439.

【2005年9月20日受付, 10月14日受理】